

日本鉄鋼協会記事

編集委員会

第1回和文会誌分科会 開催日: 3月6日. 出席者: 田中主査, ほか16名.

- 1) 「鉄と鋼」第60年第3号まで完成, 発送済み.
- 2) 21件の論文について審査報告がなされ, そのうち修正依頼6件, 掲載決定したのが15件であった.
- 3) 「鉄と鋼」第60年第8号の掲載原稿を決定した.
- 4) 「鉄と鋼」寄稿規程改訂について小委員会案が発表された. 文献の略記例については, さらに事務局で案をつくって検討されることになったが, その他の点は承認され, 次回の編集運営委員会にはかることになった.

(おもな改訂事項)

1. 論文の頁制限をもうけること.
2. 原稿提出にあたって正副2通提出すること.
3. 図面の墨入れ

欧文会誌分科会 開催日: 2月20日. 出席者: 橋口隆吉主査, ほか8名.

1. 11件の論文について審査報告がなされた.
2. 「鉄と鋼」60年6号のアブストラクトおよび「鉄と鋼」以外の国内文献から5件の論文について投稿を勧誘することが決定した.

原子力製鉄トータルシステム委員会

第4回委員会 開催日: 1月23日. 出席者: 大竹委員長, ほか22名.

1. SE分科会活動報告(正田主査)

化学平衡を仮定した還元ガス-還元鉄のシミュレーション結果によれば, 圧力が高くなると CH_4 生成, C析出が無視できなくなることがわかった. これについてはより正確な情報下での判断が必要である.

2. 50MWt 原子炉に接続される原子力製鉄トータルシステムの当面の設計について

(正田主査)

アンケート回答に基づいた設計条件の内容の説明があった.

3. MC分科会活動報告(中村主査)

現時点での主要任務は, 設定情報を円滑に流すこと, 資料管理要領を設定すること, 原子力製鉄検討事項相互関連表の検討, 第一次俯瞰PERTの見直しである. 具体的には資料のナンバリングシステムと問題提起について検討中である.

第5回委員会 開催日: 2月20日. 出席者: 大竹委員長, ほか18名.

1. 前回技術委員会におけるTS委に関係する討論事項の報告があり, それについて審議が行なわれた.

2. SE分科会活動報告(正田主査)

トータルシステムの設計条件の一部訂正の説明があった. ついで3ワーキンググループの作業状況の説明があった.

3. MC分科会活動報告(中村主査)

第1回情報窓口担当者会議と前回MC分科会の報告があった.

4. トータルシステム委の運営について

幹事会での検討経過と鉄鋼協会の意見が報告された.

第7回システムエンジニアリング分科会 開催日: 2月5日. 出席者: 正田主査, ほか18名.

1. 他サブシステムへの検討依頼

熱交換器部会, 還元ガス部会, 還元鉄小委員会へ還元炉および熱交換器内でのメタン生成および炭素析出の反応機構と反応速度の検討を依頼したとの報告が主査よりあり了承された.

2. トータルシステムの設計条件について

一部訂正ののち了承された.

3. 各WG活動状況報告

WG1, WG3とも多少の仮定の違いはあるが, シャフト炉内圧力が増加するとメタンおよび炭素が析出するという計算結果が得られた.

4. 討論

ガス組成の耐熱材料, 熱交換器への影響, その検討場所などについて討論された. またトータルシステムの評価手法を明確化する必要があることが確認された.

共同研究会

設備技術部会

第10回鉄鋼設備分科会 開催日: 2月14~15日. 出席者: 矢沢部会長, ほか66名.

第10回は, 製鋼関係の分科会で, 転炉炉体の整備面からみた問題点について討議した. OGフードの摩耗対策, 上部鉄皮の交換について, リング付き転炉とリングレス転炉との歪発生時の問題について, 鉄皮変形の問題についてなどが焦点となつて, 詳しい討論となつた. また, 最後にこの共通議題について, 座長を選出し, 1時間半にわたつてしめくくりの討議を行ない, 有意義であつた.

工場見学は, 住友重機械, 愛媛製造所の新居浜工場と東予工場を見学した.

標準化委員会

第64回幹事会 開催日: 12月17日. 出席者: 木下幹事長, ほか20名.

1. 49年度鉄鋼JIS業務計画に挿入希望の規格の取纏め

2. 日ソ油井用鋼管分科会の設置と構成

3. ISO事業促進基金の分担額

4. 中国における標準化と品質管理の実状(説明者: 今泉益正氏)

5. SI単位導入に関する規格協会SI分科会の活動状況報告

データシート部会

第16回部会 開催日: 1月29日. 出席者: 田中部会長, ほか 16 名.

1. 構造用鋼の機械的性質分科会報告

主査よりデータシートシリーズ1の第2集出版に関し, その内容や今後の予定が報告された.

また, 普通鋼の取扱いに対する分科会の討議結果が報告された.

2. 耐候性に関する調査分科会を発足させることが承認され, 発足の準備を進めることとなった.

第33回鋼管分科会 開催日: 1月28日. 出席者: 桑原主査, ほか 10 名.

1. Draft International Standard ISO/DIS 3151 Steel Tubes for Facade Scaffolding (ISO/TC5) (5-3151)

の検討および鋼管メーカーとしての意見書の作成.

この DIS についてはほぼ JIS A8951 鋼管足場が相当すると考えられるが, 原則としてとくに問題がないとの意見であるが, 一部意見を提出することにした. なおこの件については, 仮設工業会と関連するとも考えられるので, 当分科会よりも仮設工業会へ検討依頼をすることにし, 鋼管メーカーとしての意見は工業技術院材料規格課長へ, 一部意見をつけ, 中間報告の形で提出することにした.

2. 鋼管規格体系調査分科会の進行状況報告

第1回目ソ油井用鋼管分科会 開催日: 1月25日. 出席者: 桑原主査, ほか 10 名.

今度, 日本とソビエト連邦間に標準化に関する協力関係が樹立され, 鉄鋼協会がその中の一部門である「石油用鋼管に関する標準化の分野」を受け持つことになり, この部門の実質担当機関として, 当分科会が設置され, 今回第一回を開催した.

1. 主査挨拶
2. ソ標準化懇談会出席報告
3. 分科会のすすめ方討議
4. 当面の分科会のすすめ方

本年3月末までに

- (1) 油井管に関する日本規格の送付
- (2) 油井管に関しての技術資料の送付を行なう必要があるため, これら送付資料についての検討を行ない分担を決定した今回の決定に基づき次回には資料をもちより検討を行なう予定である.

なお「日本とソ連邦間の標準化と品質管理の分野における共同業務計画」については「標準化ジャーナル」1974年2月号p. 33~41に詳しいので参照されたい.

第2回目ソ油井用鋼管分科会 開催日: 2月20日. 出席者: 桑原主査, ほか 8 名.

(1) ソ標準化懇談会の進展状況報告

ソ標準化懇談会の中に9分科会が設けられる予定であるが, 石油用鋼管に関しては, 本分科会が, 主体となつて作業を進める.

- (2) 第1回分科会で決定した担当の提出資料の審議イ. API の問題点

ロ. ねじゲージ管理状況

ハ. 油井管製造工程

ニ. 各社の油井管に関する技術資料

(3) 今後のすすめ方の決定.

第3回鋼管規格体系調査分科会 開催日: 2月5日.

出席者: 田中主査, ほか 19 名.

1. 鋼管規格体系に関するユーザー側主要意見に対するコメント発表, 討議
2. 鋼管メーカーグループにおける主要検討内容発表 討議

今回とくに検討されたのは

① STPY の整理統合について

前からあつたので, 大系上からはまずいかも知れないが, このまま独立させておいておいた方がいいというユーザー側の意見も多い.

② API-5LX 相当のハイテストラインパイプおよび地下埋設鋼管 JIS 化

意見多く, まとめを得るまでにはならない.

③ 加熱炉用鋼管のボイラー熱交換器用鋼管規格からの分離独立

賛成意見が多いようである.

④ 寸法の問題

かえるとすると, 問題多く, 相当広い範囲にわたつて意見をもとめる必要があるだろうと考える.

また, 大系的には, 原則として,

用途別に規格をつくるべきであろうというのが分科会委員の合意であり, 新しい規格以外は規格をかえないとすれば現体系を大きくかえるようなことにはならず, 問題点の手直しになるだろう. しかし, 将来を考え, 十分検討し, 各種の DATA がそろつたときのことを考え, 慎重に進めることを再度確認した.

日本規格協会よりの委託では本年3月末までであるが, 延期願いを提出することにした.

第4回圧力容器用鋼材規格体系調査分科会

開催日: 2月13日. 出席者: 小倉主査, ほか 15 名.

第3回分科会に幹事より提出された, 討議資料にもとづいて検討をすすめた.

規格化に際して必要な規定項目について, 上記資料に挙げられている3項目を順次, 検討した. この結果, 高温用材料について高温引張, 熱疲労, シャルピー吸収エネルギー, 加工性, 溶接性などについて規定の必要があるとの意見が提出されたが, 保証値とするか, 指標とするか, あるいはデータの不足などが問題となり, 早急な取り入れのむずかしい点が多いことが指摘された.

同時に規格とデータシートの関係づけ, データシートの充実がとくにファブリケータ委員からとくに強く要望された.

第6回脱炭層硬化層深さ方法測定方法原案作成分科会 開催日: 1月10日. 出席者: 田中主査, ほか 19 名.

1. 鋼の脱炭層深さ測定方法

改正原案を基に, 脱炭層深さの定義, 顕微鏡およびカタサ試験による測定方法, 表示方法について検討した. なお表現, 語句は審議終了済の浸炭硬化層深さ測定方法に合わせることにした.

第7回 脱炭層硬化層深さ測定方法原案作成分科会
開催日：2月5日。出席者：田中主査，ほか18名。

1. 脱炭層深さ測定方法

第2次改正案および解説案について逐条審議を行なった。

2. 炎焼入・高周波焼入硬化層深さ測定方法

改正原案について逐条審議を行ない，条文を浸炭層規格に全面的に合わせることにした。また解説の検討も行なった。

第3回ほうろう用鋼原案作成分科会 開催日：1月28日。出席者：久松主査，ほか16名。

1. 炭化物安定化元素添加の場合のC量の緩和Ti, Nb, Zr, Vなどの添加によりCを固定化した場合にCの上限を緩和することの可否について検討された。

2. つまとび性試験方法の規定化

ホーロー特性を抑えるため，つまとび試験方法の統一について検討したが，現在確立された方法がない。しかし試験方法の確立を促進させるため，推奨できる試験方法を解説に掲載するため文献を整理し，試案を作成することとした。

第1回低温用ニッケル鋼板原案作成分科会

開催日：1月22日。出席者：金沢主査，ほか18名。

工技院より依頼されている表記の件について，学識者，研究機関，ユーザー，メーカーにより分科会を構成した。

主査には東京大学工学部・金沢武教授をお願いした。

今後数回の検討会を開催し，原案を答申するのであるが，今回の討議では対象を2 $\frac{1}{4}$ ，3.5，9% Ni鋼とすること，なるべく規格数は整理し，似寄った規格を作らないことなどを合意した。

第2回低温用Ni鋼板原案作成分科会 開催日：2月7日。出席者：金沢主査，ほか17名。

前回分科会での検討をふまえて幹事より第2次案が提出され，これを基に検討を進めた。

板厚範囲については，実績や，製造上の困難さを考慮して，いずれの鋼種も50mm以下とした。

化学成分についてはCの範囲とP，Sの規定値が問題とされた。これらについては次回分科会で再度検討することとした。

衝撃値については，ASTM規格準用ではその値が低すぎるので，実績値を参考にして再度提案を行なうこととした。

板厚許容差に関しては，成分上また熱処理を行なうことから表面疵が発生しやすい上に，製品表面性状への要求が厳しいので，G 3103を準用することとした。また板厚下限許容差を-0mmとすることが要望として出されたが，契約の実態をも参考の上，次回再度検討することとした。

鉄鋼基礎共同研究会

固体質量分析部会

第14回部会 開催日：2月6日。出席者：須藤部会長ほか16名。

1. Aグループ共同実験結果報告
2. Bグループ共同実験結果報告
3. 第3回金属中ガス成分分析共同実験結果報告
4. 論文発表3件
6. シンポジウムについて

新入会員氏名

(昭和48年12月1日～12月1日)

| | | |
|--|--|--|
| <p>正 会 員</p> <p>嶋崎 重信 (株)神戸製鋼所 神戸製鉄所</p> <p>長沢 英敏 " " 原野 紀久 " " 池田 稔 川崎製鉄(株) 技術開発部</p> <p>小坂橋寿光 " 技術研究所 白石 利明 " 千葉製鉄所 山路 守 住友金属工業(株) 和歌山製鉄所</p> | <p>鳥井 信正 " " 荒川 和義 福山熱煉工業(株)検査係 内田 国木 日本鋼管(株) 技術研究所</p> <p>大町 良治 三徳金属工業(株) 研究開発部</p> <p>坂尾 登 NTN東洋ベアリング (株)桑名工場</p> <p>菅原 敏夫 東洋鋼板(株)下松工場 田中 光人 同和工業(株)</p> | <p>谷 美澄 (株)中山製鋼所 名古屋製鋼所</p> <p>鳥谷 良則 大和工業(株)製鋼課 藤井 博務 新日本製鉄(株) 広畑製鉄所</p> <p>学 生 会 員</p> <p>岡 和雄 千葉工業大学 齊藤 武雄 東北大学, 工学部 金属工学科 本田 正春 秋田大学, 鉱山学部, 冶金学科</p> |
|--|--|--|

(昭和49年1月1日～1月31日)

| | | |
|--|--|---|
| <p>正 会 員</p> <p>井原 均 (株)神戸製鋼所 加古川製鉄所</p> <p>木原 洋治 " " 気田 英義 " " 小山 幸司 " " 田畑 幸雄 " " 小中 茂生 " "</p> | <p>吉田 成昭 " " 池田 辰雄 " 神戸製鋼所 小杉 益司 " " 辻 宗一 " " 宗像 達夫 " " 森高 満 " " 花田 清治 " 製品開発部 藤井 省一 " "</p> | <p>井上 浩一 新日本製鉄(株) 室蘭製鉄所</p> <p>金田 博 " " 菊地 勝義 " " 越田 明良 " " 松本 誠二 " " 水木 健一 " " 坂輪 光弘 " 基礎研究所</p> |
|--|--|---|

| | | | | | |
|------------------|-----------|-------|-------------|---------|---------------------------------------|
| 延本 明 | 〃 広畑製鉄所 | 中田 敏行 | 〃 〃 | 吉田 大作 | 小松ハウメット(株) |
| 佐藤 博 | 川崎製鉄(株) | 橋本 直樹 | 〃 〃 | 学 生 会 員 | |
| | 技術研究所 | 小野 茂 | (株)中山製鋼所 | 阿部 豊 | 大阪大学大院, 工学研 究科, 修士課程 |
| 橋本 修 | 〃 〃 | 大川 正夫 | 〃 | 卯目 和巧 | 大阪大学, 工学部 冶金学科 |
| 針間矢宣一 | 〃 〃 | 小林 喜一 | 日本特殊鋼(株)研究所 | 大西 康博 | 〃 〃 |
| 加藤 俊之 | 〃 〃 | 山内 直行 | 〃 〃 | 堀田 裕久 | 〃 大院, 工学研究科 修士課程 |
| 片山 英司 | 〃 〃 | 大木 茂 | 千葉工業高校教諭 | 榎木 和成 | 秋田大学, 鉦山学部, 冶金学科 |
| 後藤 隆茂 | 〃 千葉製鉄所 | 大森宮次郎 | 茨城大工機械工学 | 鈴木 紳一 | 名古屋大学工学部, 金 属及び鉄鋼工学科 |
| 影近 博 | 日本鋼管(株) | 上館 良興 | 日新製鋼(株) | 竹内 修 | 鉄鋼短期大学, 鉄鋼 東北大学大院, 工学研 究科, 博士課程 |
| | 技術研究所 | | 周南製鉄所 | 中嶋 英雄 | 北海道大学, 工学部, 金属工学科 |
| 近藤 一彦 | 〃 京浜製鉄所 | 北山 紀元 | 山陽特殊製鋼(株) | | |
| 村上 惟司 | 〃 〃 | 熊田 文勝 | (株)日立製作所 | | |
| 大岩 太郎 | 住友金属工業(株) | | 勝田工場 | | |
| | 小倉製鉄所 | 高野 憲光 | 日立金属(株)若松工場 | | |
| 加藤 俊二 | 〃 〃 | 松田 保幸 | 日都鋼業(株) | | |
| 笹岡 晃治 | 〃 〃 | 本村 貢 | 早稲田大学 | | |
| 加賀 寿 | (株)日本製鉄所 | 安河内悦男 | 東京芝浦電気(株) | 吉田 和彦 | |
| | 室蘭製作所 | | 鶴見工場 | | |
| 外 国 会 員 | | | | | |
| Artoro Lazcano | Mexico | | | | |
| Gabriel Magallon | Mexico | | | | |